教育心理学と実践活動

多様化する学生を支える大学コミュニティの形成

——留学生相談の実践を踏まえた検討と今後の展望——

大 西 晶 子

(東京大学)

Developing a Culturally Competent Campus Community for Diverse Student Populations: Findings on Support for International Students and the Future Direction of Student Services in Japanese Higher Education

AKIKO ONISHI

(THE UNIVERSITY OF TOKYO)

This paper examined a number of studies on the services available for international students in order to take a look at the challenges Japanese higher education institutions face as they seek to foster a campus climate to meet the diverse needs of their students. The necessary improvements of on-campus services for international students attending Japanese universities are considered in reference to a multicultural counseling model that was developed and implemented in the United States. Culturally competent interventions that support international students' cross-cultural adjustments are important. At the same time, assessing the needs of the campus community as a whole and facilitating change at various levels is also crucial. Organizational initiatives to produce system-level change and educational practices that positively influence host students' attitudes toward cross-cultural interaction are important as well. Researchers in educational psychology can contribute to the development of a positive campus climate for diversity by generating models that fit the context of Japanese university contexts based on practical studies. The development of scales that can assess the needs of the campus community and evaluate the outcomes of interventions is also needed.

Key Words: student services for international students, diverse student body, multicultural counseling, campus climate, internationalization of higher education

学生層の多様化が進む日本の大学において、多文化に対応したキャンパス空間の実現に向けた学生支援の現状と課題を、留学生支援の視点から概観した。まず米国の多文化カウンセリングの概念枠組みにおいて議論されている、文化的に適切な心理援助実践について紹介しながら、日本の留学生相談の課題を検討した。また留学生が異文化環境に適応していくことが出来るように働きかけを行うと同時に、大学の組織としての対応や、ホスト学生側の異文化との交流に対する態度、多様性に関わったキャンパス風土づくりなど、大学コミュニティの諸次元に働きかける必要性を指摘した。さらに多様化する学生層を支えるキャンパスの実現に向け、教育心理学研究の貢献可能性について検討し、実践研究を通じて日本の大学の状況を踏まえた研究枠組みを構築することや、キャンパスのニーズを可視化したり、取り組みを評価したりすることが出来る測定尺度の開発が期待されることを示した。

キーワード：留学生相談、多様な学生層、多文化カウンセリング、キャンパス風土、高等教育の国際化

はじめに

学生層の多様化

グローバル化を背景とした、高等教育機関の国際化推進の取り組みの中で、キャンパスは多様な文化的背景を有する学生が学ぶ場となっている。日本の大学で学ぶ留学生は15万人を超えており（日本学生支援機構, 2016）、また英語による授業のみで学位取得が可能なコースや、短期間の留学プログラム等の導入によって、学生の留学生活も多様化している。日本育ちの外国籍学生や海外での生活経験を持つ学生も、文化的多様性を考えるうえで忘れてはならない存在である。さらに、大学の 대중化や大学院重点化は、日本人学生の多様化も加速させており、性的少数派学生や障害を持つ学生など、社会的関心の高まりや制度の整備によって、そのニーズが明らかになりつつある集団もある。

一方、日本の大学は、こうした学生の多様性に十分対応しているだろうか。中でも、学生支援や学生相談の領域においては、学生のニーズに合致したサービスが提供できているのかどうか、自らの実践を見直すことが急務の課題であろう。

少数派のニーズが潜在化しやすい状況にあって、留学生は独自のニーズが比較的に見えやすく、最も可視化された少数派集団ともいえる。したがって本稿においては、学生層の多様化に大学がどのように対応していくべきかという基本的な問題意識を持ちつつも、多様な学生層を代表する集団として留学生を取り上げ、学生相談の領域を中心に検討を行っていくこととする。

留学生を対象とした心理学的研究の発展

留学生を対象とした心理学的研究は、国境を越えた学生の行き来が活発化した1950年代以降、英語圏を中心に本格化した（Zhou, Jindal-Snape, Topping, & Todman, 2008）。日本においては、企業の海外進出が活発化した1970年代に、駐在員の適応や海外生活体験を持つ子どもの帰国後の再適応への関心が高まったことにより、精神医学や教育学の場で異文化適応の問題が取り上げられるようになっていった。さらに1980年代から1990年代に、いわゆるニューカマー外国人や留学生の来日が急増すると、彼らを対象とした心理学研究が行われるようになった（大西, 2002）。

1990年代後半に教育心理学年報に掲載された田中（1998）の展望論文においては、「留学生の異文化適応研究も、不適応の治療や予防だけではなく、滞在に伴う課題達成や、ホスト社会との相互作用の充実といった、社会文化的な要素を加味して、広義のwell-

beingを視野に入れた議論が必要といえよう」（p. 144）との指摘がなされている。この指摘にもみられるように、留学生に関する初期の心理学的研究は、移住とメンタルヘルスの問題とを結び付けた医学モデルの影響を強く受けたものであり（Ward, Bochner, & Furnham, 2001; Zhou et al., 2008）、日本における研究の多くも、彼らの適応・不適応の状態と、その予測要因の同定に関心を置くものであった。医学モデルへの偏りの問題に加えて、「文化」や「適応」という概念定義が明確ではなく、理論的基盤が曖昧であることに対して、繰り返し批判が加えられてきた（高井, 1989; 譚・渡邊・今野, 2011）。

これに対して、既存の心理学の諸理論との関係を整理しながら、異文化適応を説明する理論を構築しようとする試みもみられる。たとえばFurnham & Bochner（1986）は、異文化における個人の適応を「新たな文化の学習過程」と捉え、環境と個体の相互作用プロセスとして異文化適応過程を説明する枠組みを提示している（Zhou et al., 2008）。またWard et al.（2001）は、異文化適応の領域を抑うつや幸福感のような心理的適応の側面と、適切な社会文化的スキルの利用による円滑な異文化間の関係性の構築など、社会文化的適応の側面に分けて捉え、前者をストレス対処理論（Lazarus & Folkman, 1984）、後者を社会学習理論によって説明している。

日本でも、日本語力の社会文化的適応への影響（シミッチ-山下・田中, 2010; 原田, 2013）や、個人のパーソナリティ特性の心理的適応への影響（孫, 2011）など、適応の領域を明確にしたうえで、影響を及ぼす要因を検討した研究がみられる。

また井上（1996）、井上・伊藤（1995）は、留学生が、出身文化と日本文化双方との関係をどのように維持・重視するかによって、アカルチュレーション（文化受容）態度を「同化」「分離」「周辺化」「統合」の4つに分類し、留学満足度や精神健康度との関連を検討している。これらの研究も、社会との関係性の中で個人の適応状態を捉えることに関心を置いている。

異文化適応研究における、個人と環境との相互作用の側面の重視は、個人に対する支援に加えて、個人と環境との適合性の向上を目標とする援助的介入に対しても、専門家の関心を高めていった。ソーシャルサポート、ソーシャル・ネットワーク（田中, 2000）に関する研究や、異文化間対処スキルの訓練プログラムの開発（田中, 2000; Tanaka & Okunishi, 2016）など、実践につながる研究が進められている。さらに留学生相談の

実践領域においても、これらの研究の知見を活かしながら、交流ボランティア活動やチューター学生の活用などによる支援システムの構築（加賀美・箕口, 1997; 高松, 1997, 2003; 横田・白土, 2004）や来日時のオリエンテーションの実施（大橋, 2008）など、予防を目的とした取り組みが広がっている。

高等教育機関における学生支援の役割や、留学交流のホスト大学にとっての意義を考えた場合、留学生の異文化における体験を、学生個人の適応・不適応の側面に留めず、発達促進的・異文化間教育的な観点からも捉えていくことは重要といえよう。

日本国内の留学生を対象とした研究の課題

教育心理学研究に掲載された論文としては、アジア出身の留学生を対象に、対日態度等とエスニシティの関係性を検討したもの（山崎・平・中村・横山, 1997; 山崎・倉元・中村・横山, 2000）や、留学生の日本語学習のプロセスに焦点をあてた研究（一二三, 2003, 2004; 茅本, 2000, 2002）、被援助志向性を検討した水野・石隈（2000, 2001）の研究等があげられる。また日本教育心理学会の年次大会においては、1977 年以降 Figure 1 に示すような領域において 45 本の留学生関連の研究が報告されている。国内の文化的少数者を対象とした研究の中で、留学生を扱った研究は相対的には多いとされるが（藤岡, 2014; 大西, 2010）、やはり限られており、また留学生数の増加にもかかわらず、研究数は 1990 年代から 2000 年代前半にピークを迎えている。加えて、前述のように、異文化適応を環境と個人の適合性の向上と

いう枠組みで捉える視点はみられるものの、研究全体としては、適応を留学生側の要因で説明しようとする要因研究が多い傾向は続いている。

また留学生相談のあり方など、サービス構築の前提となる議論が不十分であり、そうした議論を支える実証的研究や援助モデルに関する研究も乏しい（大西, 2016b）。たとえば、日本人学生と留学生との学生相談施設等の利用状況を比較した研究はみられず、心理援助を提供していくにあたって、留学生の独自性とは何なのかをデータで十分に示し得ていない。大西（2012）が、留学生の在籍者数が概ね 250 名を超える大学の、学生相談機関を対象に実施した調査では、回答した大学の 4 割がそもそも相談機関の利用者データに「留学生」の分類カテゴリーを設けていなかったことから、ニーズの把握に必要な、専門家側の取り組みが進んでいない段階にあるといえる。

対して国外に目を向けると、英語圏の大学を中心に、留学生の学内相談機関の利用率の検討が盛んであり（Hyun, Wuinn, Madon, & Lusting, 2007; Nilsson, Berkel, Flores, & Lucas, 2004; Yakushko, Davidson, & Sanford-Martens, 2008; Yi, Giseala, & Kishimoto, 2003）、利用傾向の現地生との比較（Mitchell, Greenwood, & Guglielmi, 2007; Raunic & Xenos, 2008）によって、留学生の特徴が明らかにされている。またこうした実態把握を踏まえて、ニーズに沿ったサービス形態が提案されている（Mori, 2000; Yakunina & Weigold, 2011）。

Figure 1 教育心理学会年次大会における留学生等を対象とした研究の領域と変遷（領域については筆者による分類）

文化的にセンシティブな研究の必要性

留学生集団のニーズを明らかにしていくことが必要とされるが、その際、研究方法の選択や対象の抽出、データの収集・分析、言語的手段、質問紙の作成・翻訳・標準化など研究の各段階において、文化的にセンシティブ (Rogler, 1989) であることが求められる。対象・目的・デザインが、学生集団の複雑で豊かな多様性を十分に反映したものであることは (Pope, Mueller, & Reynolds, 2009)、意味のある結果を得るために必須といえる。ただしこのようなデータを収集するのは容易ではない。

加えて、日本人学生を留学生の対照集団と位置付ける際にも留意が必要である。たとえば田中 (2000) は、留学生の属性や生活条件は日本人学生と異なることも多く、これらを一致させるのが難しいこと、留学生にとって課題となる適応領域のうち、ゲスト特有の問題はホスト学生には現実味が乏しく評価しにくいことを指摘している。さらに、留学生集団内の文化的多様性をいかに扱うかも課題である (大西, 2016b)。留学生や文化的少数派集団を対象とした研究に付随する、研究法上のこうした問題は、国外でも同様に指摘されている (Yoon & Portman, 2004)。

また Dunne (2013) は、米国においては、多様性や文化差の問題は「人種」を中心に議論されるのに対して、米国以外の国では、「国籍」に基づいて議論されるという相違を指摘している。先行研究の大半が米国で行われていることから、研究の大前提に留意し、概念や尺度の文化や社会を越えた適用範囲に関する慎重な検討が求められるだろう (Bernhard et al., 2015)。田中 (1998) も、国外の先行研究によって主張される従来の定説を盲信せず、「日本では日本でのデータに基づいた、科学的な研究の展開が必要」(p. 144) と述べている。

一方で、他国との比較の視点も不可欠であり、特に取り組みの進んだ国を参照枠組みとすることは日本の大学独自の課題把握を可能とする。したがって、本稿では、留学生の受け入れが進んだ英語圏における研究を中心に、諸外国の研究についても適宜触れていく。

留学生のニーズに対応した学生支援の実現

援助の文化的適切性という視点

多文化カウンセリングの概念 以下では、留学生の多様なニーズに対応した援助に関して、多文化カウンセリング (multicultural counseling) の概念を参照しながら先行研究の知見を整理していく。

文化に配慮した心理援助に対しては、多文化カウンセリングに加えて、異文化間カウンセリング (cross-cultural counseling) という用語も使用されている。概念間に明確な使い分けはなされておらず、相互互換可能な用語として用いられている (井上, 1997, 1998) が、近年は「多文化カウンセリング」の用語がより一般的といえよう。また井上 (1997) は、「別の文化的背景を持つ個人の間でおこなわれるカウンセリング」(Jackson, 1995)、「ある文化・民族・人種的背景をもった専門的カウンセラーが、別の文化・民族・人種的背景をもったクライアントの認知的・情緒的・心理的そして精神的発達を促進する目的で働きかけをおこなう過程」(D'Andrea & Daniels, 1995) といった、多文化カウンセリングのいくつかの定義を紹介しているが、後述の通り、多文化カウンセリングの議論の発展の中で 1990 年代の定義は、今日の米国における多文化カウンセリングの姿を十分には説明しきれていない。

たとえば近年の議論においては (Ratts, Singh, Nassar-McMillan, Butler, & McCullough, 2016)、社会における特権的位置づけ (privileged) や周辺化された位置づけ (marginalized) といった側面から、カウンセラー・クライアント関係を説明しており、たとえば女性の白人カウンセラーは、人種的にはパワーを有する privileged な地位にあるが、ジェンダーの側面においては社会的に抑圧された集団に属していると見なされる。多文化カウンセリングの新たな概念の下では、カウンセリングの場において生じる複雑な文化の問題を扱うことが可能である。

研究の全体的な動向を把握するために、学術文献データベース Web of Science Core Collection を用い、1945 年から 2015 年の間に発行された英語論文のうち “cross-cultural counseling” “multicultural counseling” “social justice counseling” の検索用語をトピックスに含む論文を抽出した。結果は Figure 2 に示す通りであり、論文数が 1980 年代以降徐々に増加していること、2000 年代に入ってから安定的に一定程度の論文が発表されていることがわかる。また “cross-cultural counseling” から “multicultural counseling” へと、使用される用語の変遷が確認できる。

井上 (1998) は、多文化カウンセリングや、その背景にある米国の多文化主義 (multiculturalism) について、「一種の方向性と思想を含んだ概念」であると述べている。南川 (2016) は、米国における多文化主義は、「黒人や先住民などを周縁化する人種主義に対す

(論文数)

る政策や社会運動が集積した結果として登場」し、「1960年代の公民権運動とそれを背景とした社会改革の中で具体化」されたものであり、中でも「個人の人種、肌の色、性、出身国」にもとづく差別の禁止や貧困対策といった政策の中で、実質的な「平等」の達成のための具体的な政策により推し進められてきたと説明している。さらに、社会運動の展開や制度化のプロセスにおいて、多文化主義が、人種やエスニシティ以外の文化へもその射程を広げてきたこと、今日ではジェンダーやセクシャリティ等も1つの文化として捉える視点が定着していることを指摘している。

こうした米国における多文化主義の展開に伴って、多文化カウンセリングの領域においても、その主張や議論の対象は変化している。初期の研究は、「黒人」「アジア系」「ヒスパニック」「先住アメリカ人」という4つの集団に関して、メンタルヘルスの援助機関の利用率や援助の際の留意点を明らかにすることに関心を注いでおり、集団ごとの文化的特徴に配慮したサービスを実現することによって、メンタルヘルスの状態の改善を図ることを目的としたものであったといえる。対して近年は、「社会の中で周縁に位置づけられてきた」という、少数派の社会的位置づけに注目し、人種や民族集団を超えた議論が行われている。また「支配的ではないアイデンティティから構成された個人は、社会的な不正義を経験するリスクに常に晒されている」(Collins, Arthur, Brown, & Kennedy, 2015) との理解に基づき、個に対する適切な支援とともに、社会的公正性の実現に向けた、多数派を含む社会全体への働きか

けが重要であることが強調されている。

文化的に適切に対応する能力 多文化カウンセリングを巡る議論の中で、それが通常の心理援助とどのように異なるのか、専門家はどのような職能を身につけることが期待されているのかという問題には、高い関心が集まる。対人援助や教育領域において、対象者の文化的背景に対する理解のもと、文化を尊重しながら関わることは、文化的に適切 (cultural appropriate)、文化的にセンシティブ (cultural sensitive) など、さまざまに表現されているが、総称としては multicultural competence, cultural competence が用いられることが多い。前述のデータベース Web of Science Core Collection を用い検索した結果、2015年までに発行された multicultural competence をトピックスに含む英語論文数は988であり、分野別にみると、483本 (48.9%) が心理学領域、206本 (20.9%) が教育学領域の研究である。半数以上の545本は2010年以降の発表であり、最も論文数が多いのは2015年の106本 (10.7%) である。このうち、心理的な援助の提供を行うカウンセラー等の職能に関しては、文化的に適切な対応を行う能力を、多文化カウンセリング能力 (Multicultural Counseling Competences: 以下 MCC) と称し、態度、知識、スキルの3側面から能力を捉える Sue らによるモデルが浸透している (Sue, Arrendo, & McDavos, 1992; Sue et al., 1982; Sue et al., 1998)。このモデルを基本的概念モデルとして、1990年代には活発な議論が展開され、文化の問題を適切に扱うことが、研究や実践に従事する心理学者の専門性の一部であるとの認識

が共有化されていった。2003年には、「多文化教育、訓練、研究、実践と組織の変容に関する心理学者のためのガイドライン」が米国心理学会（American Psychological Association: 以下APA）によって策定され（APA, 2003）、さらに各種職能団体も、文化的に適切な対応を行う必要性を、専門家としての倫理要項において示している。たとえば米国カウンセリング学会（American Counseling Association, 2014）の倫理綱領では、アセスメント、カウンセラーとクライアントとの援助関係の構築、スーパーバイズやカウンセラーの教育・訓練等の実践に関わる諸領域において、文化への適切な配慮が必要であるとの言及がみられる。またMCCのモデルは、人種・民族的集団を想定して策定されたものであったが、前述の通り、多文化主義の議論が展開する中で、性的少数者等の様々な社会的少数派集団において、文化的に適切な援助を求める同様の議論が広がっていった（Ratts et al., 2016）。これらを踏まえ、2015年には、「多文化対応と社会的公平性の視点に基づくカウンセリング能力」（Multicultural and Social Justice Counseling Competencies: 以後MSJCCと称する）モデルが、改訂版モデルとして提示されている（Ratts, Singh, Nassar-McMillan, Butler, & McCullough, 2015）。

対して国内では、2008年に多文化間精神医学会の専門誌において「“cultural competence”（文化を理解する能力、文化を理解し対処する能力）」（野田・井上, 2008）の特集が生まれ、葛西（2008）がMCCの詳しい概念紹介を行っている。しかしながら、学術領域においても実践領域においても、心理的援助の文化的適切性を巡る議論が大きく展開している状況にはない。また金沢（1998）は、「多文化間カウンセリングは、単に「外国人」を相手にするカウンセリング」ではないことを強調しているが、多くの心理援助の専門家にとって、多文化カウンセリング、留学生相談は未だに「日本語以外で実施される外国人を対象としたカウンセリング」「日本語を話さない学生に対するカウンセリング」といった認識に留まっている現状がある（大西, 2016a）。

文化的・言語的背景のマッチング 心理援助の文化的適切性の議論を複雑にする1つの要因は、「援助者とクライアント間の人種・民族、文化的背景、使用言語の一致」が、援助に影響を及ぼすという主張の存在であろう。MCCが習得可能な職能の議論であるのに対して、属性のマッチングを重視したこの主張は、人材の配置やサービスの構築の方針と深く結びつくものである。「誰が文化的に適切なサービスの担い手になり得るか」に関して、2つの主張は異なる前提に立っ

ており、人材育成や人材配置、サービス形態のあり方を考えていく際には、いずれの前提に立つのかを明確にし、実証的なデータを示しながら議論を進めていくことが重要といえよう。

属性のマッチングの効果を検討した研究のメタ分析の結果は、一貫した結果を示していないが（Maramba & Nagayama, 2002）、人種的・民族的背景の一致や文化的類似性が認知された相手のほうが、援助者として好まれ（Atkinson & Lowe, 1995）、信頼感が形成されやすく援助関係の構築が容易であり（Farsimadan, Darghi-Lorenz, & Ellis, 2007; Meyer, Zane, & Cho, 2011）、初期の中断が少ない（Lau & Zane, 2000）といった効果を示す研究もある。またマッチングがクライアントの自己探求（Garkhuff & Pierce, 1967）やカウンセリングのプロセスを促進する（Farsimadan et al., 2007; Meyer et al., 2011）、あるいは最終的な援助効果を高める（Farsimadan et al., 2007; Lau & Zane, 2000）といった主張もみられる。

一方、人種・民族性の一致した援助関係においては、問題の認知の仕方、対処の志向性、治療の目的などに対して認知的一致が生じやすく（Zane et al., 2005）、また共通する人生経験を有していると推測されやすい（Meyer et al., 2011）といった特徴を指摘する研究もみられる。つまり、マッチングによって得られる様々な効果は、属性の一致による直接的な効果ではなく、認知的一致を経由した間接的なものであると考えられている。Cabral & Smith (2011) も、154の研究を対象に、マッチングの効果をメタ分析した結果として、「人々が同じ人種・民族的背景を持つセラピストを好み、そのセラピストをより肯定的に評価する傾向は示されるものの、セラピーの成果はセラピストの人種・民族性とは独立したものである」と述べている。また「人種・民族のマッチングがより重要性を持つのは、セラピーに入る前と治療同盟が形成されるセラピーの初回のセッションにおいてである」として、その効果の限定性を指摘している。民族・人種の側面に加え、性差や社会経済的地位、教育レベル、世代など様々な要因が相互作用には影響し得ることを考えると、民族・人種や言語のマッチングにより得られる効果は限定的と考える必要があろう。また属性の一致が、実際以上に認識の共通性に対する期待を高めることが、後の失望を生むという危険性も指摘されている（Cabral & Smith, 2011）。

言語や文化的背景のマッチングについて、日本の留学生相談の場を想定した議論を行う際には、次に述べるような点に留意が必要となろう。

まず、学生と出身文化を共有する専門家が不足しており、現実的な選択肢となりにくい状況にあることから、日本の大学においては、属性のマッチングという方針での人材配置には限界がある。現状としては、日本の留学生相談は、大半のケースにおいて、留学生にとって外国語である日本語、あるいは援助者・留学生の双方にとって第一言語ではない英語が、相談時の媒介言語となる。

さらに留学生相談は、特定の文化出身者ではなく、多様な文化出身の学生を対象としたサービスであり、かつ西欧的な価値に根差すカウンセリング・心理療法の理論を用いた援助行為であることを念頭に置く必要がある。専門家や相談資源に対する学生の態度は、彼らがカウンセリングという西欧的な概念にどの程度馴染んでいるのか、日本的価値をどの程度取り入れているのかによっても異なるだろう（大西, 2016a）。

つまり、単にサービスを提供する言語や専門家の文化的背景を問うだけでは意味がなく、媒介言語による援助の質的向上をいかに図るか、学生の文化的背景やホスト社会における文化変容の様相が、カウンセリングという援助様式の選択にどのように影響するのか、といったことを議論していく必要がある。これらは日本を含む非西欧諸国において、文化的に多様な学生の心理援助の様式を考えていく際に共通の課題といえよう。

文化的に適切な援助に向けた具体的課題

専門家の育成 米国では、APA 公認の博士課程プログラムにおいて、援助者の多文化対応力に関するコースの導入が進んでいる（Bernal & Pandilla, 1982; Hills & Strozier, 1992）。量的な拡大の時期を終え、今日注目されているのはプログラムの質的側面であり、中でもエビデンス重視の流れの中で、訓練プログラムがMCCの向上に役立つこと、さらにはMCCが高いことが、援助の高い効果と関連していることを示すことが求められている。しかしながら両者の関係を示す実証データは不足しており、またどのような訓練が効果を生みうるのかも検討が続けられている（Malott, 2010; Roger, Angela, Soth-McNett, & Matthew, 2007）。

通常の援助実践にいかなる工夫を施すことで、文化的に適切な介入法といえるのかについても議論が続いており（Griner & Smith, 2006）、単に文化的な側面に対する気づきを持つだけでなく、文化的視点を実践に具体的に取り入れていくスキルの側面の訓練が必要であると述べられている（Cardemil & Battle, 2003; Jones, Begay, Nakagawa, Cevalco, & Sit, 2016; Hansen et al., 2006）。さら

に、臨床教育におけるスーパーバイザーやメンターの果たす役割の重要性や、適切な指導者の不足の問題も議論されている（Chan, Yeh, & Krumboltz, 2015; Jones et al., 2016; Ridley, Mendoza, & Kanitz, 1994）。たとえば Jones et al. (2016) は、文化に配慮した臨床教育に加えて、ケースに対するコンサルテーションの機会が継続的に提供されることが、多文化対応力の向上に役立つことを示している。多数派出身者と少数派出身者とは、必要とされる訓練や訓練効果が異なる可能性を指摘する研究もある。Chan et al. (2015) は、訓練において適切なメンタリングを行うことが、臨床家を目指す民族的少数派出身の大学院生の獲得と、彼らの中退防止（retention）に有効であり、また学生は人種・民族性を共有するメンターを好み、そうしたメンターからより多くのことを学ぶことできることを示している。一方 Chao, Wei, Good, & Flores (2011) は、訓練を十分に受けた層と初心者層を比較した際に、初心者層では自身も人種的・民族的少数者である人のほうが、多文化への対応に関して気づきが高いが、熟練層ではそうした差が消失することを示している。

南 (2008) は、専門家の多文化への対応力育成の前提条件として「異文化への関心」の有無が関与していると指摘しており、大西 (2014) も、日本国内で外国人を対象とした心理援助を担う専門家は、海外出身者や海外生活経験を持つ人が多く、自身の異文化性に伴う気づきの高さが、実践への関与の動機づけとなっていることを明らかにしている。さらに大西 (2012) は、前述の国内の学生相談従事者を対象とした調査の結果から、学生相談に従事した経験の長さや留学生対応に関する戸惑いや不安には、関連が見られないことを示しており、通常の臨床経験の中では留学生への対応経験が蓄積しにくく、学生相談への習熟と留学生への対応力が関連しにくい状況を指摘している。また「学内連携」「通訳」「研修」「スーパーバイズ」といった取り組みが、留学生相談の拡充には求められると認識されていた。職能との関連が深い「研修」に関しては、しかしながら、「留学生対応機会があり、動機づけが高まっている」ことが自発的参加の前提条件として求められる。また研修の実施に不可欠な、指導的役割を担うことが可能な人材の不足も、日本において留学生相談の質的拡充を図るうえでの障壁となっている。

職能の評価 文化的に適切な援助者の育成や援助実践の発展を促していくためには、そうした取り組みが効果を生むことを示していく必要があり、測定・評価研究への関心は高い。しかしながら、MCC の概念モ

デルを反映させた専門性に関する尺度を用いても、概念モデルが想定する三次元の因子構造を得られないという尺度の妥当性の問題や、下位尺度間の相関の高さ、自己報告式尺度が社会的のぞましさの影響を受けることなど、様々な角度から問題点が指摘されている (Bernhard et al., 2015; Constantine & Ladany, 2000, Kitao-ka, 2005; Worthington, R. L., Soth-Monett, A. M., & Moreno, M. V.; 2007)。カウンセラーによる自己報告を代替するものとして、クライアントによる評価も提案されている (Drinane, Owen, Adelson, & Rodolfa, 2016) が、クライアントによる評価と、カウンセリングへの満足度や最終的な効果との間に正の関連を示す研究もある一方で、Tao, Owen, Pace, & Imel (2015) によるメタ分析の結果のように、両者の関係性を示さない研究も多い。同様にクライアントとカウンセラーの二者の組み合わせを単位とした研究 (Dyadic study) においても、カウンセラーの MCC と援助効果の間に明確な関連は示されていない (Dillon et al., 2016; Fuertes et al., 2006)。そもそもカウンセラーの MCC を、クライアントが正確に評価できるのかという問題もある。これに対して、Tao et al. (2015) は、自己評価やクライアントの評価ではなく、実際のカウンセリング場面について、観察者・監督者による評価を導入することや、縦断的研究を取り入れることを提案している。

大学の取り組み

組織次元における対応 提供する援助サービスが利用者のニーズに合致した、文化的に適切なものとなるかどうかは、個人の職能によってのみ規定されるわけではなく、サービスを提供する組織全体が有する文化への対応力にも影響される (Arredondo et al., 1996; Darnell & Kuperminc, 2006; Sue, 2001; Sue et al., 1998)。たとえば Darnell & Kuperminc (2006) は、組織の活動指針 (mission statement) において、文化への配慮に言及がみられ、多文化対応力向上のための研修が実施されている組織において、被雇用者の文化的な配慮に対する認識が高いことを示し、組織と個人の多文化対応力が相互に影響を及ぼし合っていることを指摘している。Barksdale et al. (2012) は、文化的・言語的ニーズに合致したメンタルヘルスサービスを実現するためには、サービスを提供する「システムレベル」の変化がまず必要であると指摘している。そのためには実証的なデータの提示によって、取り組みの必要性や適切性を説明できることが重要となる。たとえば、サービスの新たな導入や、既存のサービスの改善を図る際には、サービスの不足状況や、利用者のニーズとのミスマッ

チの状態を示し、そのうえで、よりニーズに合ったサービスの開発を進めていくこととなる (Castro, Barrera, & Martinez, 2005; Hwang, 2009)。

Hwang (2009) は、文化的に多様な民族集団に対するサービス提供の選択肢には (a) 効果が示されている治療法をそのまま用いる、(b) 民族的少数派の文化的ニーズにより合致するように修正を加える、(c) それぞれの民族集団に適した新しい文化特定の方法を開発するという3つがあり、実現可能性が最も高いのは (b) であると指摘している。また Hernandez, Nesman, Mowery, Acevedo-Pilakovich, & Callejas (2009) は、先行研究のレビューを踏まえ、「コミュニティの文脈」「その地域に住む人々の文化的特徴」「組織のインフラ」「提供されているサービス・支援」の4要因が一致している度合いによって、組織次元の多文化への対応度を捉えている。

組織の対応方針と人材配置 Barksdale et al. (2012) は、潜在的な利用者のニーズとの合致、組織的な対応のモニタリング、評価の仕組み、組織の活動方針の提示といった各種指標を用いて、システム次元における文化的配慮の程度を評価している。前述の大西 (2012) の調査においては、回答した大学の約4割の学生相談機関は、留学生に対する対応方針に関して「無回答」であり、「特になし」が13.2%、「日本人学生同様」が7.5%、「原則日本人学生同様・言語ニーズへは対応方針あり」が20.8%、「ケースの内容に応じて他部署と連携・言語ニーズへは対応方針あり」が7.5%であった。3割弱の大学は、言語ニーズへの対応方針を有していることになる。英語による学生受け入れが拡大する中で、日本語以外の言語での対応ニーズを持つ学生は増えており、また前述の通り、援助者との属性や使用言語の一致は、援助資源へのアクセスを促進することがわかっている。したがってサービスへのアクセス促進が課題となっているのであれば、日本語以外の言語でのサービス提供は、有効な改善策の1つといえるだろう。移民の第一世代や難民を対象とした心理援助の議論においても、サービスが対象者の母語で提供されることの重要性は海外でも指摘されている。

一方、留学生対応においては、国外の大学で必ずしもサービスの多言語化が進んでいるわけではない。この背景には、留学生数の多い英語圏の大学においては、高い英語力が受け入れ条件として課されていること、留学生が現地で身につける言語 (英語) とカウンセラーの第一言語が大半において一致していることなど

が関係していよう。また欧米諸国では、日本と比べると複数言語を話す援助専門家が得やすいことも、対応言語という道具的側面が議論の中心とならない理由にはあるだろう。

言語の面への注目には、他にも問題がある。特に国内では、留学生対応が、単なるサービスの英語化の問題にすり替えられることが少なくない。しかしながら、前述の通り、在日留学生の大多数にとって、そもそも英語は母国語ではない。さらに日本語力の高さは適応度の高さを予測していない（大西, 2016b）にもかかわらず、日本語が出来る学生は、文化的なニーズを持っていないかのような認識をされることが多く、言語力の側面からのみ留学生のニーズをとらえることは適切とはいえない。

Biever et al. (2002) は、ヒスパニック系クライアントに対して、バイリンガルのカウンセラーが文化的に適切な実践を行うためには、スペイン語で心理援助実践に従事する場面を想定した教育・訓練を受けることが必要であると述べている。単なる疎通性の次元を超えた、文化的適切性の側面を踏まえた議論が求められている。

日本の大学における留学生相談体制の問題点 学生のニーズの多様化を実践の場で体感する学生相談の専門家から、1990年代に入ると学生相談体制の充実化の必要性を指摘する声が高まり、こうした動向を受け、2000年には当時の文部省が、「大学における学生生活の充実方策について」（文部省, 2000）という報告書をまとめている。2007年には「大学における学生相談体制の充実方策について」（日本学生支援機構, 2007）において、学生相談が大学教育の一環であることが示され、学生相談体制の整備・充実化の必要性が指摘されている。

具体的な体制整備を後押しするものとしては、日本学生相談学会が、学生相談機関ガイドラインを2013年に示している（日本学生相談学会, 2013）。また福盛他（2014）は、個々の大学が自校の学生相談機関の発展を考える際に、ガイドラインと共に用いることができる「学生相談機関充実イメージ表」を開発している。さらに、キャンパスのニーズに対応した相談システムの検討（池田・吉武・高野, 2006, 2008; 成瀬・大原・植木, 2015）や、ピア・サポート活動や授業場面を用いた介入、コンサルテーション（川崎他, 2016）など、個別相談を越えた新たな学生相談のモデルの模索が、各大学の学生相談の専門家によって進められている。

しかしながら、こうした学生相談全体における取り

組みの中で、サービスの利用者や働きかけの対象として「留学生」を想定し、文化的多様性への対応を積極的に議論しているものはみられない。当然、留学生の多様なニーズにどう対応していくのか、どのような人材を学生相談の専門家として配置するのか、学内連携や研修体制をいかに整えるのかといった、留学生相談の拡充につながるようなシステムレベル・組織次元の体制整備は議題に上っていない。

同様に、学生の教育改善活動への参画やピア・サポート活動への従事（沖, 2013, 2015）など、国内の大学で近年注目される領域においても、そこで行われる議論と、留学生支援において従来から行われてきたチューター活動や、国際交流ボランティア活動等の取り組みに関する議論は、あまり接点がない。

留学生相談の体制に関する研究としては、たとえば水野（2003）が、被援助志向性という概念を用いて、東アジア出身の留学生の相談の仕方について検討し、その傾向を踏まえた援助実践を提案している。また大西（2016a）は、留学生が援助サービス利用にあたって認識する障壁と実際の学内の相談資源の利用状況を検討し、既存の相談資源を利用しにくいと感じる留学生が存在すること、日本語力や出身地域、資源の存在についての認識などによって、認識される障壁が異なることを示している。またこうした特徴に対して、心理援助に特化しない多機能な相談資源の有効性を指摘している。しかしながらこれらの研究はいずれも、学生相談の既存のシステムの中に、留学生相談をどのように統合していくのか、あるいは学生相談のシステムをどのように変容させることが可能かについては、具体的な視点を示し得ていない。

大西（2016a）は、学生相談と留学生相談の活動が分断されやすい状況に関して、そもそも国の施策の段階で留学生の議論が別枠に置かれている問題を指摘している。結果、留学生のみに研究や実践の視点が置かれ、留学生が学ぶキャンパス環境や、留学生と接触するホスト成員側の要因についての十分な検討が進んでおらず、大学全体としての組織的議論の遅れ・不足が生じていると考えられる。

大学コミュニティに対する働きかけ

日本人学生への働きかけ

多数派学生の異文化交流への態度 ホスト成員から得られるソーシャルサポートやホスト学生との親密な関係の構築は、留学生の適応に影響を及ぼすことが指摘されてきた。さらに近年は、キャンパスの多様性の

拡大や異文化接触経験が、多数派の学生にもたらす教育的価値が強調されており（大西, 2016c）、国内の大学でも、留学生との接触経験を日本人学生のグローバル人材育成に結び付けた議論が盛んに行われている。

Gurin, Dey, Hurtado, & Guerin (2002) は、大学という場において多様な背景を持つ学生が学ぶ重要性を、青年期後期という発達段階の課題と認知発達の視点から説明しており、社会的関係の中でのアイデンティティ達成に取り組む青年期後期の時期に、慣れ親しんだものを離れ、非連続的な環境の中で過ごす経験が認知的発達を促すと指摘している。さらに、学習の場において、多文化混合グループは、文化的に単一なグループよりもパフォーマンスがよいという結果を示す研究もみられる（De Vita, 2002）。また米国の研究においては、民族や文化集団間の融和的ではない雰囲気は、少数派の学生はもとより、多数派の学生に対しても否定的な影響を及ぼすことが指摘されている（Hurtado, Griffin, Arellano, & Cuellar, 2008）。留学生とホスト学生間の関係性が深まり、文化的に多様な学生間の豊かな相互交流が生じることは、留学生にとってもホスト学生にとっても重要であるといえるが、留学生がホスト学生と満足のいく人間関係を結ぶことが容易ではないことも国内外の研究が繰り返し指摘してきた点である（Furnham & Bochner, 1986; 石原, 2011; 田中, 1998, 2003; 横田, 1991; 上原, 1988）。

留学生数が増加しても、組織的な変化や集団間の有意義な交流が自動的に生じるわけではない（Chang, Chang, & Ledesma, 2005）。変化に向けた意図的で計画的な働きかけが必要であり、日本人学生等ホスト側の成員への働きかけを行うことは、多様な学生を支える大学コミュニティの形成において欠くことのできない取り組み領域といえよう。両者のダイナミックスに、より強い影響力を有するのは、多数派のホスト学生であることは疑いようがないが（Dunne, 2013）、キャンパス全体を俯瞰したときに、留学生を受け入れるホスト側への働きかけが不足している現状は明白である。友人の作り方や友人の概念が文化によって違うことや（石原, 2011; 田中, 2003; Trice & Elliot, 1993; 横田, 1991）、留学生がその文化で必要とされる対人関係構築のスキルを有さないことなど、関係形成が進まない留学生側の要因は様々に挙げられてきたのに対して、ホスト側の学生に焦点を置いた研究は乏しい（Dunne, 2009, 2013; Smith & Khawaja, 2011; Ward, 2001; Williams & Johnson, 2011）。Dunne (2009) は、アイルランドの大学において現地出身学生を対象に調査を行い、留学生は、ホス

ト学生と比べて社交の場に積極的に顔を出さず、授業場面中心の学生生活を送る「文化的に異質」な存在であると見なされていること、そのことが留学生との交流を難しくする要因であると現地学生側は感じていることを指摘している。また Dunne (2013) は、異文化間の交流においては、自然発生的な交流の開始が困難であるとし、こうした状況を説明するために、人間は一般的に類似性の高いものとの接触をより好むという、“homophily” の概念を用いることを推奨している。

日本でも、奥西・田中 (2009) が、留学生との関わり方の経験を持つ日本人学生を対象に、留学生との接触時に生じる異文化間の問題の認知と対処行動についての調査を行っている。その結果、問題の原因を文化差に帰属し、それに伴う葛藤を乗り越え関係が深まるという順番で日本人学生の学習が進むとは限らないこと、留学生との交流が、異なる文化的背景を持つ同世代との初めての直接的継続的接触経験である学生が多く、文化的相違を前提に問題を理解する構えがない可能性があること等を指摘している。また田中・畠中・奥西 (2011) は、日本人学生が留学生に期待する対人行動様式を検討し、行動様式がどの程度日本的ではなく、文化行動の実践を試みる姿勢を重視していることを指摘している。異文化間の交流を促進させるための、教育的働きかけを具体化していく際には、こうしたホスト学生側の特徴を明らかにしていくことも重要であるといえよう。

ホスト学生に対する教育的働きかけ Gurin & Nagda (2006) は、有意意味な異文化間の接触を大学内で生じさせていくためには、直感や経験に基づいた取り組みではなく、エビデンスに基づいた介入が必要であると指摘している。さらに Pettigrew & Tropp (2006) のメタ分析の結果では、接触の偏見軽減に及ぼす効果は条件が統制された実験状況を用いた研究で最も高いこと、接触状況を回避する選択肢がない場合に効果が高いことなどが明らかにされている。

国内においても、日本人学生が参加する合同授業（加賀美, 1999; 宮本, 2013; 箕浦, 1992, 1998; 横田, 1998）や、チューター活動、国際交流活動の場における学生間の相互交流（村田, 1996; 大西, 2009; 田中, 2003）の効果を検討した実践研究などは、1990年代から行われている。また田中 (2015) は、異文化接触の具体的な場面を想定し、その場面に対応する日本人学生側のスキル習得を目指したプログラムを開発している。

このように、授業や交流活動場面を用い、大学が介在する形で生じる異文化間の接触は、自然発生的な異

文化接触よりも接触条件の統制や交流促進のためのファシリテートがしやすく、肯定的な教育効果を生みだしやすいと考えられる。ただし国内の実践は、プログラム内容や効果測定・効果指標についての議論が不十分な段階にある。たとえば山田(2009)は、多文化・異文化に関わる教育実践の日米比較を行い、「人権や民族に関する授業の履修」に関しての日米差はそれほど大きくないものの、「異文化理解体験プログラムや海外研修プログラムへの参加の経験」は日本ではかなり少ないという結果を示している。個人の知識面に働きかけが偏る現象は、性の多様性を扱った教育実践に関する日本と諸外国の取り組みを比較した戸口・葛西(2015)も、同様の指摘を行っている。それによると、諸外国の実践では、「どのように学校の風土を性の多様性に対して肯定的にしていくか」という環境への働きかけやそのための具体的なスキルレベルに注目が置かれているのに対して、日本の実践では「性の多様性に対する理解の促進」を目標とした実践が中心であると述べている。

多数派の動機づけの問題 教育的介入を通じた異文化間の交流促進の有効性が主張される一方で、授業や課外活動などの場を用いる介入の限界を指摘する研究もみられる。中でも「多数派の動機づけ」は、多くの研究において指摘される問題点である。

たとえば、異文化間の接触機会をホスト学生が選択するかどうかは、学生の大学入学以前の経験によって既に規定されており(Summers & Volet, 2008; Williams & Johnson, 2011)、異文化混在状況に馴染みがある学生のみが、異文化とのさらなる接触到積極的に臨んでいくとの指摘がなされている。つまり接触機会が少なく学習がより期待される人ほど、授業や交流会への自主的な参加を回避するかもしれないという、参加集団の選択性(selectivity)の問題がある(Gurin & Nagda, 2006)。

国内の大学の状況を見ると、留学生数は増加傾向にあるとはいえ、一部のコースやプログラムに留学生が集中している場合もあり、留学生との接点を日常的には持たない日本人学生も少なくない。必修ではない留学生との混合授業や国際交流サークルなど、強制ではない学びの場への参加に学生をいかに動機づけていくか(箕浦, 1992; 奥西・田中, 2009; 大西, 2016c)は、日本人学生に働きかけていく際の大きな課題である。

Dunne(2013)は、留学生の在籍者の多いコースに在籍している現地学生を対象に、留学生との交流動機に関するインタビューを行い、「知覚される有益性

(utility)」が、留学生との交流の最大の動機付けであることを明らかにしている。また、大学が留学生と現地学生との接触を促進させたいのであれば、大学は交流の意義を大学の方針の中で明確に示し、学生がその価値に気づくことが出来るよう働きかける必要があると述べている。つまりホスト学生側の異文化との接触の動機を明らかにするだけではなく、学生に対して異文化への接触を動機づけたり、多様性・異質性への関心を高めたりするような大学側からの働きかけが、キャンパス全体で行われていることが必要といえる。

大西(2016a)は、国内の大学における国際化推進、留学生受け入れ政策は、国際貢献的な色合いから、日本人学生のグローバル人材化への貢献へと、近年、理念レベルでのシフトが生じていることを指摘している。こうした状況を背景に、日本の大学では、日本人学生に対する異文化接触への動機づけが、海外留学促進の一環として行われていることが多い。そのため、大学の発するメッセージとして、学内の多様性に目を向け、文化的に異質なクラスメイトや研究室の同僚学生と、日常的な関係を構築・維持し、共存していくことを重視したものは極めて乏しい。また、キャンパスにおける多様性の拡大がもたらす教育的価値についても、明確な指標は示されていない(大西, 2016c)。大学がそこから何を導ようとしているのか、留学生・日本人学生にどのような学びを期待しているのかを明示することは、キャンパスの全体的な雰囲気づくりに必須であろう。これらは学生個人への直接的な支援や、学生集団に対する教育的働きかけとはまた別次元の、大学の組織としての課題である。

キャンパスという場の持つ影響力

キャンパス風土を捉える枠組み 多様な学生のニーズに対応していくためには、キャンパス全体を働きかけの対象としていくことが重要である。そのためには、まずは学生がキャンパスの環境をどのように認知しているのかを把握する必要がある。

1950年代以降、大学の大衆化が進んだ米国においては、キャンパス環境や風土を測定する尺度が盛んに開発されており(Astin & Holland, 1961; Pace, 1963; Pace & Stern, 1958等)、統一された項目に対する大学別、集団別の反応の比較を通じて、教育の場における体験の集団間差が検討されている。米国における、教育の場の持つ風土の研究に関して、伊藤・松井(1996, 1998)は、学習者のみを対象とした議論から教師等を含めた議論へ、小中高校を対象とした研究から、高等教育の場へと拡大していったことを指摘している。小中高校

までを対象とした研究は、学級を対象に行われることが多いのに対して、高等教育における議論は、学級を対象とした議論に加えて（たとえば Fraser, Treagust, & Dennis, 1986）、大学全体の風土に着目した議論が活発である点が特徴といえる。また 1960 年代から 1970 年代にかけての米国社会における市民権運動の高まりと、高等教育機関におけるアファーマティブアクション政策を背景に、キャンパスにおいては人種・民族的多様性が拡大し、集団間接触機会の増加がもたらされた。これによって、集団間の軋轢への対応と、文化的多様性推進のキャンパス風土（Campus climate for diversity）の実現は高等教育の重要な取り組み課題となり、高等教育研究の専門家の関心も高まっていった（Hurtado et al., 2008; Milem, Chang, & Antonio, 2005; Roger, 2008）。

Hurtado (1992) は、人種・民族性の側面に焦点を当て、キャンパスの空間が、それぞれの集団に属する学生達にどのように知覚されているのかを検討しており、人種問題など、個人に影響を及ぼし得る共通の要因に加えて、各大学固有の要因が存在することを指摘している。さらに Hurtado et al. (2008) は、大学の風土に関連した 90 の先行研究を整理し、多様性に対するキャンパス風土を説明する概念モデルを示している。それによると、組織がこれまでどのように多様性の問題に取り組んできたか（歴史的経緯）、構成員に占める文化的少数派の比率はどの程度か（構造的な多様性）、集団間の関係性や交流はどの程度行われているかといった複数の次元が、キャンパスの風土に影響を及ぼす可能性がある。

学生のキャンパス風土の知覚が及ぼす影響 大学の規模や入学者の選抜性（selectivity）の度合い、学生サービスに割く予算の割合などの構造的な要因は、学生の知覚のフィルターを経て間接的に影響力を持つと考えられており（Hurtado, 1992）、学生がキャンパス風土を否定的に認知した場合には、大学生活のすべての領域の適応（社会的側面、学業的側面、個人的情緒的側面、組織に対する所属感）にマイナスの影響が及ぶことが指摘されている（Hurtado et al., 2008）。

Glass & Westmont-Campbell (2014) は、留学生が知覚する大学コミュニティへの所属感を測定し、所属感が学業成績に影響を及ぼすことを指摘している。さらに Slaten, Elison, Lee, Yough, & Scalise (2016) は、所属感は単にホスト学生や同胞学生との間の直接的な対人交流に対する満足感により得られるのではなく、対人交流を促進するような大学の働きかけや、意味のある活動への参加、キャンパスにおける差別的扱いや

教員からの積極的な働きかけの有無、キャンパスの設備や資源が豊富でそれを十分に利用できること、学業的な達成を実感できることなど、多角的な領域の影響を受けることを示している。Chang, Denson, Sáenz, & Misa (2006) は、個々の学生の有する、人種を越えた対人交流量に加えて、学生が在籍する大学全体で、異人種間交流がどの程度行われているのかという平均的な姿、つまりはその大学コミュニティ全体としての異人種間の交流状況も、多様性により生まれる教育効果に影響を及ぼすことを明らかにしている。

また、先行研究においては、歴史的に抑圧されてきた社会的集団に属する人々のほうが、キャンパス風土を否定的に評価する傾向があることが示されており、たとえば Rankin & Reason (2005) は、非白人は白人よりも、女性は男性よりも、キャンパス風土を否定的に認知していることを示している。さらに、Bowman (2013) は、全米 28 の大学の在籍学生の 1 年時と卒業時の調査の結果を比較し、在学中の人種集団間の相互交流経験は、多数派・少数派いずれの立場から経験されたものであっても、肯定的な教育効果と結びついていることを示している。つまりいかなる社会的集団に属する学生の場合も、大学在学中の異文化との接触の経験は意味を持つといえる。

学生の声を反映させる仕組み 伊藤・松井 (1996) は、風土という概念の定義の困難さから、概念や風土測定の方法論の整備や、風土改善のための実践的介入に向けた諸研究が、風土研究の実用性を高めるためには求められると指摘している。Hurtado et al. (2008) は、全学を対象とした学生調査においては、少数派学生のニーズは把握されにくく、特定の集団に絞ったアセスメントが必要とされる場合があると述べている。そのため、全学生を対象とした全国的、あるいは複数の大学横断的な大規模調査が行われる一方で、特定の少数派集団を対象とした尺度の開発も行われている。米国で開発された尺度は、人種や民族的少数派を対象として想定したものが多く、性的少数派 (Rankin, 2003) や留学生を対象とした尺度も開発されている。留学生を対象としたものとしては、たとえば Wang et al. (2014) が開発した、留学生の所属キャンパスにおける友好度の知覚を測定する、「留学生に対するキャンパスの友好度尺度 International Friendly Campus Scale: IFCS」が挙げられる。

日本では、江原 (1977) が、高等教育のキャンパス環境を測定する College and University Environmental Scales (CUES) の日本版を作成し、5 大学を対象

に調査を行っている。大学ごと、学生の属性ごとの比較の結果は、いずれも類似した傾向を示しており、また全体として日本の大学が学生にとって、米国の大学と比してアカデミック・コミュニティの風土的特性に乏しく、自己実現しにくいキャンパスとみなされている様子を示している。さらに江原(1977)は、米国の高等教育機関を前提に開発された尺度は、そもそも日本の大学の特徴を把握するのに適切な尺度といえない可能性についても示唆している。作田(1998)は、大学や大学生が増加し、学生の不本意入学等の問題が指摘されるようになった1990年代の状況を受けて、学生の大学風土に対する知覚が大学や学生の特性によっていかに異なるのかを検討し、大学の偏差値、あるいは同じ大学の中でも専攻によって学生の風土認知が異なることを示している。また佐古(2005)は、大学水準の学級環境尺度である、Fraser et al. (1986)の大学学級環境インベントリ(College and University Classroom Environment Inventory: CUCEI)の日本語版を作成し、授業評価に用いている。

このようなキャンパスや学級の風土に注目した実証的な研究は、しかしながら日本の高等教育機関においてはさほど活発に行われておらず、学生を下位集団に分類し、その相違を明らかにするような分析も一般的ではない。江原(1977)の研究が示すように、学生集団内の同質性の高さが前提とされてきたことが、高等教育機関において多様性に対する風土研究に関心が高まらなかった一要因と考えられよう。しかしながら、冒頭にも述べた通り、大学を取り囲む状況の急速な変化と学生層の多様化の中で、当然こうした前提は変化している。

さらに、近年の高等教育機関における動きとして、構成員の視点、中でも学生の視点を大学の組織運営や体制整備、サービスに反映させていく学生参画の流れが強まっている。加えて、学生のキャンパスにおける体験と様々な成果指標との間の結びつきを示すことに対する社会的要請も、諸外国において高まっている(沖, 2014; 田中, 2016)。こうした流れは、日本の大学にも影響を与えつつあり、今後益々強まっていくと考えられる。学生・教職員の多様な声を反映させながら、多様性に関わったキャンパス風土の構築に取り組んでいくことが重要な時代を迎えているといえるだろう。

教育心理学研究に期待されること

教育・研究環境が学生の様々なニーズに合致したものとなることは、学生の多様化が進む日本の大学に求

められる必須の要件であることを本論では示してきた。個々の学生を文化的に適切な形で支える援助サービスの整備と、キャンパスの雰囲気をもより多様性・多文化に関わったものとするための働きかけとが、大学には求められている。

学生の多様なニーズを可視化し、大学コミュニティに向けて代弁したり、あるいは変化を促す働きかけを行ったりしていくことは、少数派学生を支援する専門家の重要な役割である(Darnell & Kuperminc, 2006; Sue, 2001; Sue et al., 1992; Sue et al., 1998; Toporek & Reza, 2001)。また潜在化した少数派のニーズの存在に対して気づきを持ち、自身の身につけた専門性の枠や既存のサービスの適合性を問い直すことは、教育や対人援助に取り組む際に問われる基本的な姿勢であろう。本論で示したような、留学生を対象とした研究や留学生相談の実践は、既存の学生支援の枠組みの持つ特徴や限界を映し出す鏡であり、専門家は、この鏡をうまく用いることによって、学内の多様なニーズに対する理解を深めていくことが出来るだろう。

さらに既存の知識体系についての見直しも、必要である。Marsella & Pedersen (2004)は、臨床教育を担う学部は、カウンセリングの国際化のために、カリキュラムの改定を行うことが必要であり、それに加えて、国際化が、心理学の発展に不可欠であるということを、学部全体の「哲学・価値」として示す役割があると述べている。

では、こうした課題への取り組みにおいて、教育心理学領域の研究は、いかなる貢献が可能であろうか。

山森(2013)は、学級規模等が児童生徒に与える影響を検討した展望論文において、以下のような指摘を行っている。まず、学級規模等の教育条件の整備は、社会的な要請を踏まえた政策として実施されてきたものであり、その政策を検証し、望ましい学級規模や学習集団編制のあり方を検討していくことは、教育を対象とした研究の1つの方向性として重要である。さらに日本の学校の特徴を考慮すると、諸外国における研究の知見の適用可能性は低く、議論を進めるためには、検討材料や指針を提供する研究が必要となる。山森(2013)はまた、こうした目的のためには、発達、社会、教授学習、測定評価といった教育心理学の諸部門にまたがった研究が必要であること、しかしながらそうした学際的な研究の方向性は教育心理学領域において一般的ではないことも指摘している。ここで述べられている、教育心理学研究の社会的役割や研究上の課題は、本稿が議論してきた、学生の多様化と学生支援

の領域にも多くは共通している。

グローバル化の中の高等教育政策というマクロ的要因と、学生個人の心理や集団間の相互作用の次元とを研究対象とし、政策やその影響を受けたキャンパス風土全体が、留学生の適応や留学生と日本人学生の相互作用にどのような影響を及ぼすのかを示していく必要がある。日本の大学の特徴と学生集団の特徴を踏まえ、留学生を含む少数派学生の声も抽出可能な、文化的社会的文脈に即した研究枠組みと測定尺度の開発を進めることは、得られた結果を施策や教育実践・援助実践に反映させていくために必須の要件である。また、教育の場を扱う実践的な学術領域として、文化的にセンシティブな心理学的研究がいかにあるべきかを率先して議論していくことも、教育心理学の専門家に期待される役割といえよう。

引用文献

- American Counseling Association. (2014). *ACA code of ethics*. Alexandria, VA: Author.
- American Psychological Association. (2003). Guidelines on multicultural education, training, research, practice and organizational change for psychologists. *American Psychologist*, 58, 377-402.
- Arredondo, P., Toporek, R., Brown, S. P., Jones, J., Locke, D. C., Sanchez, J., & Stadler, H. (1996). Operationalization of multicultural counseling competencies. *Journal of Multicultural Counseling and Development*, 24, 42-78. doi:10.1002/j.2161-1912.1996.tb00288.x
- Astin, A. W., & Holland. (1961). The environmental assessment technique: A way to measure college environment. *Journal of Educational Psychology*, 52, 308-316.
- Atkinson, D. R., & Lowe, S. M. (1995). The role of ethnicity, cultural knowledge, and conventional techniques in counseling and psychotherapy. In J. G. Ponterotto, J. M. Casa, L. A. Suzuki, & C. M. Alexander (Eds.), *Handbook of multicultural counseling* (pp. 387-414). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Barkdale, C. L., Ottley, P. G., Stephens, R., Gebreselassie, T., Fua, I., Azur, M., & Walrath-Greene, C. (2012). System-level change in cultural and linguistic competence (CLC): How changes in CLC are related to service experience outcomes in systems of care. *American Journal of Community Psychology*, 49, 483-493. doi:10.1007/s10464-011-9442-1
- Bernal, M. E., & Padilla, A. M. (1982). Status of minority curricula and training in clinical psychology. *American Psychologist*, 37, 780-787.
- Bernhard, G., Kibbe, R. A., vonWolff, A., Dingoyan, D., Schulz, H., & Mösko, M. (2015). Development and psychometric evaluation of an instrument to assess cross-cultural competence of healthcare professionals (CCCHP). *PLoS ONE*, 10(12), e0144049. doi:10.1371/journal.pone.0144049
- Biever, J. L., Castaño, M. T., Fuentes, C., González, C., Servín-López, S., Sprowls, C., & Tripp, C. G. (2002). The role of language in training psychologists to work with Hispanic clients. *Professional Psychology Research and Practice*, 33, 300-336. doi:10.1037/0735-7028.33.3.330
- Bowman, N. A. (2013). The conditional effects of interracial interactions on college student outcomes. *Journal of College Student Development*, 54, 322-328.
- Cabral, R. R., & Smith, T. B. (2011). Racial/ethnic matching of clients and therapists in mental health services: A meta-analytic review of preferences, perceptions, and outcomes. *Journal of Counseling Psychology*, 58, 537-554. doi:10.1037/a0025266
- Cardemil, E. V., & Battle, C. L. (2003). Guess who's coming to therapy?: Getting comfortable with conversations about race and ethnicity in psychotherapy. *Professional Psychology: Research and Practice*, 34, 278-286. doi:10.1037/0735-7028.34.3.278
- Castro, F. G., Barrera, M., & Martinez, C. R., Jr. (2005). The cultural adaptation of preventive interventions: Resolving tensions between fidelity and fit. *Prevention Science*, 5, 41-45. doi:10.1023/B:PREV.0000013980.12412.cd
- Chan, A. W., Yeh, C. J., & Krumboltz, J. D. (2015). Mentoring ethnic minority counseling and clinical psychology students: A multicultural, ecological, and relational model. *Journal of Counseling Psychology*, 62, 592-607. doi:10.1037/cou0000079

- Chang, M. J., Chang, J. C., & Ledesma, M. C. (2005). Beyond magical thinking: Doing the real work of diversifying our institutions. *About Campus*, 10(2), 9-16.
- Chang, M. J., Denson, N., Sáenz, V., & Misa, K. (2006). The educational benefits of sustaining cross-racial interaction among undergraduates. *Journal of Higher Education*, 77, 430-455.
- Chao, R. C. L., Wei, M., Good, G. R., & Flores, L. Y. (2011). Race/Ethnicity, color-blind racial attitudes, and multicultural counseling competence: The moderating effects of multicultural counseling training. *Journal of Counseling Psychology*, 58, 72-82. doi:10.1037/a0022091
- Collins, S., Arthur, N., Brown, C., & Kennedy, B. (2015). Student perspectives: Graduate education facilitation of multicultural counseling and social justice competency. *Training and Education in Professional Psychology*, 9, 153-160. doi:10.1037/tep0000070
- Constantine, M. G., & Ladany, N. (2000). Self-report multicultural counseling competence scales: Their relation to social desirability attitudes and multicultural case conceptualization ability. *Journal of Counseling Psychology*, 47, 155-164. doi:10.1037//0022-0167.47.2.155
- D'Andrea, M., & Daniels, J. (1995). Promoting multiculturalism and organizational change in the counseling profession—A case study. In J. G. Ponterotto, J. M. Casas, L. A. Suzuki, & C. M. Alexander (Eds.), *Handbook of Multicultural Counseling* (pp. 17-33). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Darnell, A. J., & Kuperminc, G. P. (2006). Organizational cultural competence in mental health service delivery: A multilevel analysis. *Journal of Multicultural Counseling and Development*, 34, 194-207. doi:10.1002/j.2161-1912.2006.tb00039.x
- De Vita, G. (2002). Does assessed multicultural group work really pull UK students' average down? *Assessment and Evaluation in Higher Education*, 27, 153-161. doi:10.1080/02602930220128724
- Dillon, R. R., Odera, L., Fons-Scheyd, A., Sheu, H. B., Ebersole, R. C., & Spanierman, L. B. (2016). A dyadic study of multicultural counseling competence. *Journal of Counseling Psychology*, 63, 57-66. doi:10.1037/cou0000118
- Drinane, J. M., Owen, J., Adelson, J. L., & Rodolfa, E. (2016). Multicultural competencies: What are we measuring? *Psychotherapy Research*, 26, 342-351. doi:10.1080/10503307.2014.983581
- Dunne, C. (2009). Host students' perspectives of intercultural contact in an Irish university. *Journal of Studies in International Education*, 13, 222-239. doi:10.1177/1028315308329787
- Dunne, C. (2013). Exploring motivations for intercultural contact among host country university students: An Irish case study. *International Journal of Intercultural Relations*, 37, 567-578. doi:10.1016/j.ijintrel.2013.06.003
- 江原武一 (1977). 学生文化論における環境尺度作成の試み—CUES 日本版の作成と実施 奈良教育大学教育研究所紀要, 13, 29-45.
- Farsimadan, F., Draghi-Lorenz, R., & Ellis, J. (2007). Process and outcome of therapy in ethnically similar and dissimilar therapeutic dyads. *Psychotherapy Research*, 17, 567-575. doi:10.1080/10503300601139996
- Fraser, B. J., Treagust, D. F., & Dennis, N. C. (1986). Development of an instrument for assessing classroom psychosocial environment at universities and colleges. *Studies in Higher Education*, 11, 43-54. doi:10.1080/03075078612331378451
- Fuertes, J. N., Stracuzzi, T. I., Bennett, J., Scheinholtz, J., Mislowack, A., Hersh, M., & Cheng, D. (2006). Therapist multicultural competency: A study of therapy dyads. *Psychotherapy*, 43, 480-490. doi:10.1037/0033-3204.43.4.480
- 藤岡 勲 (2014). 『心理臨床学研究』における民族的マイノリティを対象とした研究活動 心理臨床科学, 4, 13-23.
- 福盛英明・山中淑江・大島啓利・吉武清實・齋藤憲司・池田忠義…苦米地憲昭 (2014). 大学における学生相談体制の充実のための「学生相談機関充実イメージ表」の開発 学生相談研究, 35, 1-15.
- Furnham, A. F., & Bochner, S. (1986). *Culture shock: Psychological reaction to unfamiliar environments*. London and New York: Methuen.
- Garkhuff, R. R., & Pierce, R. (1967). Differential

- effects of therapist race and social class upon patient depth of self-exploration in the initial clinical interview. *Journal of Counseling Psychology*, 31, 642-634.
- Glass, C. R., & Westmont-Campbell, C. (2014). Comparative effects of belongingness on the academic success and cross-cultural interactions of domestic and international students. *International Journal of Intercultural Relations*, 38, 106-119. doi:10.1016/j.ijintrel.2013.04.004
- Griner, D., & Smith, T. B. (2006). Culturally adapted mental health intervention: Meta analytic review. *Psychotherapy: Theory, Research, Practice, Training*, 43, 531-548. doi:10.1037/0033-3200.44.3.4.
- Gurin, N., & Nagda, A. (2006). Getting to the what, how, and why of diversity on campus. *Educational Researcher*, 35, 20-24.
- Gurin, R., Dey, E., Hurtado, S., & Gurin, G. (2002). Diversity and higher education: Theory and impact on educational outcomes. *Harvard Educational Review*, 72, 330-366. doi:10.17763/haer.72.3.01151786u134n051
- Hansen, N. D., Randazzo, K. V., Schwartz, A., Marshall, M., Kalis, D., Frazier, R., ... Norvig, G. (2006). Do we practice what we preach? An exploratory survey of multicultural psychotherapy competencies. *Professional Psychology: Research and Practice*, 37, 66-74. doi:10.1037/0735-7028.37.1.66
- 原田登美 (2013). 言語能力のレベル差と異文化社会適応への影響—ホームステイをした留学生の日本語力は適応にどう関わるか 言語と文化, 17, 241-268.
- Hernandez, M., Nesman, T., Mowery, D., Acevedo-Pilakovich, I. D., & Callejas, L. M. (2009). Cultural competence: A literature review and conceptual model for mental health services. *Psychiatric Services*, 60, 1046-1050. doi:10.1176/appi.ps.60.8.1046.
- Hills, H., & Strozier, A. L. (1992). Multicultural training in APA-approved counseling psychology programs: A survey. *Professional Psychology, Research and Practices*, 23, 43-51.
- 一二三朋子 (2003). 意識的配慮の共生的学習に関する因果モデルの検討—アジア系留学生の場合 教育心理学研究, 51, 175-186. doi:10.5926/jjep1953.51.2_175
- 一二三朋子 (2004). 意識的配慮の共生的学習に関する因果モデルの検討—ボランティア日本語教室アジア系学習者の場合 教育心理学研究, 52, 93-106. doi:10.5926/jjep1953.52.2_93
- Hurtado, H. (1992). The campus racial climate: Contexts of conflict. *Journal of Higher Education*, 63, 539-569. doi:10.2307/1982093
- Hurtado, S., Griffin, K. A., Arellano, L., & Cuellar, M. (2008). Assessing the value of climate assessments: Progress and future directions. *Journal of Diversity in Higher Education*, 1, 204-221. doi:10.1037/a0014009
- Hwang, W. (2009). The formative method for adapting psychotherapy (FMAP): A community-based developmental approach to culturally adapting therapy. *Professional Psychology: Research and Practice*, 40, 369-377. doi:10.1037/a0016240
- Hyun, J., Wuinn, B., Madon, T., & Lusting, S. (2007). Mental health need, awareness, and use of counseling services among international graduate students. *Journal of American College Health*, 56, 109-118. doi:10.3200/JACH.56.2.109-118
- 池田忠義・吉武清實・高野 明・佐藤静香・関谷佳代 (2006). 学生相談における学業・進路の相談内容の特徴に基づく支援のあり方 東北大学高等教育開発推進センター紀要, 2, 143-155.
- 池田忠義・吉武清實・高野 明 (2008). 学生相談における相談内容の特徴に基づく支援のあり方—相談内容の質的分析から 学生相談研究, 28, 167-180.
- 井上孝代 (1996). 外国人留学生のアカルチュレーション態度と留学生生活の満足度 東京外国語大学留学生日本語教育センター論集 22, 209-221.
- 井上孝代 (1997). 異文化間臨床心理学序説 多賀出版
- 井上孝代 (1998). 多文化時代のカウンセリング理論 現代のエスプリ, 377, 30-40.
- 井上孝代・伊藤武彦 (1995). 来日1年目の留学生の異文化適応と健康—質問紙調査と異文化間カウンセリングの事例から 異文化間教育, 9, 128-142.
- 石原 翠 (2011). 学生の友人関係における期待と体験の否定的認識との関連—中国人留学生の場合 異文

- 化間教育, 34, 136-150.
- 伊藤亜矢子・松井 仁 (1996). 学級風土研究の経緯と方法 北海道大学教育学部紀要, 72, 41-71.
- 伊藤亜矢子・松井 仁 (1998). 学級風土研究の意義 コミュニティ心理学研究, 2, 56-66.
- Jackson, M. L. (1995). Multicultural counseling—Historical perspective. In J.G. Ponterotto, J. M. Casas, L. A. Suzuki, & C. M. Alexander (Eds.), *Handbook of Multicultural Counseling* (pp. 3-16). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Jones, J. M., Begay, K. K., Nakagawa, K., Cevalco, M., & Sit, J. (2016). Multicultural counseling competence training: Adding value with multicultural consultation. *Journal of Educational and Psychological Consultation*, 26, 241-265. doi:10.1080/10474412.2015.1012671
- 加賀美常美代 (1999). 大学コミュニティにおける日本人学生と外国人留学生の異文化間接触促進のための教育的介入 コミュニティ心理学研究, 2, 131-142.
- 加賀美常美代・箕口雅博 (1997). 留学生相談におけるコミュニティ心理学的アプローチの試み—チューター制度導入後の留学生寮相談室活動の質的変化 コミュニティ心理学研究, 1, 15-30.
- 金沢吉展 (1998). 多文化間カウンセラー 現代のエスプリ, 377, 41-49.
- 葛西真記子 (2008). Multicultural counseling competencies—北米のカウンセリング心理学の立場からの multicultural competencies—ここと文化, 7, 152-158.
- 川崎 隆・古川真由美・田中崇恵・江上奈美子・慶野遥香・高野 明 (2016). 学生相談活動における評価方法に関する研究の概観—授業, グループ活動, ピア・サポート, コンサルテーションに着目して— 学生相談研究, 36, 197-208.
- 茅本百合子 (2000). 日本語を学習する中国語母語話者の漢字の認知—上級者・超上級者の心内辞書における音韻情報処理— 教育心理学研究, 48, 315-322. doi:10.5926/jjep1953.48.3_315
- 茅本百合子 (2002). 語彙判断課題と命名課題における中国語母語話者の日本語漢字アクセス 教育心理学研究, 50, 436-445. doi:10.5926/jjep1953.50.4_436
- Kitaoka, S. (2005). Multicultural counseling competencies: Lessons from assessment. *Journal of Multicultural Counseling & Development*, 33, 37-47. doi:10.1002/j.2161-1912.2005.tb00003.x
- Lau, A., & Zane, N. (2000). Examining the effects of ethnic-specific services. *Journal of Community Psychology*, 28, 63-77. doi:10.1002/(SICI)1520-6629(200001)28:1<63::AID-JCOP 7>3.0.CO;2-Z
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. (1984). *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer Pub. Co.
- Malott, K. M. (2010). Multicultural counselor training in a single course: Review of research. *Journal of Multicultural Counseling & Development*, 38, 51-63. doi:10.1002/j.2161-1912.2010.tb00113.x
- Maramba, G. G., & Nagayama, H. G. C. (2002). Meta-analyses of ethnic match as a predictor of dropout, utilization, and level of functioning. *Cultural Diversity and Ethnic Minority Psychology*, 8, 290-297. doi:10.1037//1099-9809.8.3.290
- Marsella, A. J., & Pedersen, P. (2004). Internationalizing the counseling psychology curriculum: toward new values, competencies, and directions. *Counseling Psychology Quarterly*, 17, 413-423. doi:10.1080/09515070412331331246
- Meyer, O., Zane, N., & Cho, Y. (2011). Understanding the psychological processes of the racial match effect in Asian Americans. *Journal of Counseling Psychology*, 58, 335-345. doi:10.1037/a0023605
- Milem, J. F., Chang, M. J., & Antonio, A. L. (2005). *Making diversity work on campus: A research based perspective*. Washington, DC: Association of American Colleges and Universities.
- 箕浦康子 (1992). 日本人学生と留学生—予備調査—岡山大学における異文化接触の実態とその促進要因 岡山大学文学部紀要, 18, 69-85.
- 箕浦康子 (1998). 日本人学生と留学生—相互理解のためのアクション・リサーチ— 文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書, 46-61.
- Mitchell, S. L., Greenwood, A. K., & Guglielmi, M.C. (2007). Utilization of counseling services: comparing international students and U.S. college students. *Journal of College Counseling*, 10, 117-129. doi:10.1002/j.2161-1882.2007.tb00012.x
- 南川文里 (2016). アメリカ多文化社会論—「多からなる一」の系譜と現在— 法律文化社
- 南 昌廣 (2008). 多文化カウンセリング能力における

- 態度の役割 ころと文化, 7, 159-164.
- 宮本美能 (2013). 留学生と日本人学生の親密化阻害要因を排除する方策—多文化クラスにおける参与観察に基づいて 留学生教育, 18, 15-24.
- 水野治久 (2003). 留学生の被援助志向性に関する研究 風間書房
- 水野治久・石隈利紀 (2000). アジア系留学生の専門的ヘルパーに対する被援助志向性と社会・心理学的変数の関連 教育心理学研究, 48, 165-173. doi:10.5926/jjep1953.48.2_165
- 水野治久・石隈利紀 (2001). アジア系留学生の専門的ヘルパー, 役割的ヘルパー, ボランティアヘルパーに対する被援助志向性と社会・心理学的変数の関連 教育心理学研究, 49, 137-145. doi:10.5926/jjep1953.49.2_137
- 文部省 (2000). 大学における学生生活の充実方策について (報告) —学生の立場に立った大学づくりを目指して Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/012/toushin/000601.htm (2016年11月15日)
- Mori, S. (2000). Addressing the mental health concerns of international students. *Journal of Counseling and Development*, 78(2), 137-144. doi:10.1002/j.1556-6676.2000.tb02571.x
- 村田雅之 (1996). チューターの援助と仕事観 飯山論叢, 3(2), 46-76.
- 成瀬道子・大原佳子・植木陽子 (2015). 学生相談活動30年におけるシステム整備の評価—発展を支えた要因の分析と今後の課題 学生相談研究, 36, 123-134.
- 日本学生支援機構 (2007). 大学における学生相談体制の充実方策について—「総合的な学生支援」と「専門的な学生支援」の「連携・協働」 Retrieved from <http://www.jasso.go.jp/gakusei/archive/jyujitsuhosaku.html> (2016年11月15日)
- 日本学生支援機構 (2016). 平成27年度外国人留学生在籍状況調査結果 Retrieved from http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2015/index.html (2016年11月2日)
- 日本学生相談学会 (2013). 学生相談機関ガイドライン Retrieved from <http://www.gakuseisodan.com/wp-content/uploads/public/Guideline-20130325.pdf> (2016年11月30日)
- Nilsson, J. E., Berkel, L. A., Flores, L. Y., & Lucas, M. S. (2004). Utilization rate and presenting concerns of international students at a university counseling center: Implications for outreach programming. *Journal of College Students Psychotherapy*, 19, 49-59. doi:10.1300/J035v19n02_05
- 野田文隆・井上孝代 (2008). 文化を理解する能力の教育とはどうあるべきか 特集にあたって ころと文化, 7, 112-113.
- 沖 清豪 (2014). イギリスにおける学生支援の評価 大学教育学会誌, 36, 89-93.
- 沖 裕貫 (2013). 「学生参画型FD (学生FD活動)」の概念整理について—「学生FDスタッフ」を正しく理解するために 中部大学教育研究, 13, 9-19.
- 沖 裕貫 (2015). 「学生スタッフ」の育成の課題—新たな学生参画のカテゴリーを目指して 名古屋高等教育研究, 15, 5-22.
- 奥西有里・田中共子 (2009). 多文化環境下における日本人大学生の異文化葛藤の対応—AUC-GS学習モデルに基づく類型の探索 多文化関係学, 6, 53-68.
- 大橋敏子 (2008). 外国人留学生のメンタルヘルスと危機介入 京都大学学術出版会
- 大西晶子 (2002). 異文化間接触に関する心理学的研究についてのレビュー—文化的アイデンティティ研究を中心に 東京大学大学院教育学研究科紀要, 41, 301-310.
- 大西晶子 (2009). 留学生と日本人の一对一交流時の困難認知に関する研究—交流促進のためのプログラム改善策の提案 東京大学留学生センター教育研究論集, 15, 21-39.
- 大西晶子 (2010). 多文化化する日本社会における心理援助の現状と今後の課題について 東京大学留学生センター教育研究論集, 16, 43-55.
- 大西晶子 (2012). 留学生への相談・支援体制の現状と課題—学生相談機関における対応実態を中心に 学生相談研究, 33, 25-37.
- 大西晶子 (2014). 在住外国人に対する心理援助—実践の課題と心理援助専門家の役割に注目して コミュニティ心理学研究, 18, 93-108.
- 大西晶子 (2016a). キャンパスの国際化と留学生相談—多様性に対応した学生支援サービスの構築 東京大学出版会
- 大西晶子 (2016b). 学生相談に関する近年の研究の動向—近年の留学生を対象とした研究論文のレビューから 学生相談研究, 37, 142-152.
- 大西晶子 (2016c). 留学生の受け入れとキャンパスにおける多様性対応の推進—米国の取り組みを踏まえ

- た日本の大学における課題の整理 留学生教育, 21, 55-62.
- Pace, C. (1963). *College and university environmental scales*. Princeton, N.J.: Educational Testing Service.
- Pace, C., & Stern, G. (1958). An approach to the measurement of psychological characteristics of college environment. *Journal of Educational Psychology*, 49, 269-277.
- Pettigrew, T. F., & Tropp, L. R. (2006). A meta-analytic test of intergroup contact theory. *Journal of Personality and Social Psychology*, 90, 751-783. doi:10.1037/0022-3514.90.5.751
- Pope, R., Mueller, J., & Reynolds, A. (2009). Looking back and moving forward: Future direction for diversity research in student affairs. *Journal of College Student Development*, 50, 640-658.
- Rankin, S. R. (2003). *Campus climate for gay, lesbian, bisexual, and transgender people: A national perspective*. New York: The National Gay and Lesbian Task Force Policy Institute. Retrieved from http://www.thetaskforce.org/static_html/downloads/reports/reports/CampusClimate.pdf (2016年11月5日)
- Rankin, S. R., & Reason, R. D. (2005). Differing perceptions: How students of color and white students perceive campus climate for underrepresented groups. *Journal of College Student Development*, 46, 43-61. doi:10.1353/csd.2005.0008
- Ratts, M. J., Singh, A. A., Nassar-McMillan, S., Butler, S. K., & McCullough, J. R. (2015). *Multicultural and Social Justice Counseling Competencies*. Retrieved from <https://www.counseling.org/docs/default-source/competencies/multicultural-and-social-justice-counseling-competencies.pdf?sfvrsn=20> (2016年7月27日)
- Ratts, M. J., Singh, A. A., Nassar-McMillan, S., Butler, S. K., & McCullough, J. R. (2016). Multicultural and social justice counseling competencies: Guidelines for the counseling profession. *Journal of Multicultural Counseling and Development*, 44, 28-48. doi:10.1002/jmcd.12035
- Raunic, A., & Xenos, S. (2008). University counseling service utilization by local and international students and user characteristics: A Review. *International Journal of Advanced Counselling*, 30, 262-267. doi:10.1007/s10447-008-9062-0
- Ridley, C. R., Mendoza, D. W., & Kanitz, B. E. (1994). Multicultural training: Reexamination, operationalization, and integration. *The Counseling Psychologist*, 22, 227-289.
- Rogler, L. H. (1989). The meaning of culturally sensitive research in mental health. *The American Journal of Psychiatry*, 146, 296-303.
- Roger, L. W. (2008). Measurement and assessment in campus climate research: A scientific imperative. *Journal of Diversity in Higher Education*, 1, 201-203. doi:10.1037/a0014406
- 佐古順彦 (2005). 大学生による授業評価 (4) —大学生の講義型学級環境の知覚について 人間科学研究, 18(1), 19-29.
- 作田良三 (1998). 大学風土に対する学生の知覚に関する研究 中国四国教育学会 教育学研究紀要, 44 (第1部), 141-146.
- シミッチ-山下ミラ・田中共子 (2010). 在日留学生の間での社会文化的適応のスケールの探索的因子分析 岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要, 29, 27-38.
- Slaten, C. D., Elison, Z. M., Lee, J.-Y., Yough, M., & Scalise, D. (2016). Belonging on campus: A qualitative inquiry of Asian international students. *The Counseling Psychologist*, 44, 383-410. doi:10.1177/0011000016633506
- Smith, R. S., & Khawaja, N. G. (2011). A review of the acculturation experiences of international students. *International Journal of Intercultural Relations*, 35, 699-713. doi:10.1016/j.ijintrel.2011.08.004
- 孫 怡 (2011). 在日中国人留学生の異文化適応に影響を及ぼす個人の内的資源と外的資源 パーソナリティ研究, 202, 73-83.
- Sue, D. W. (2001). Multidimensional facets of cultural competence. *The Counseling Psychologist*, 29, 790-821. doi:10.1177/0011000001296002
- Sue, D. W., Arrendo, P., & McDavos, R. J. (1992). Multicultural counseling competencies and standards: A Call to the profession. *Journal of Multicultural Counseling and Development*, 20, 64-88. doi:10.1002/j.2161-1912.1992.tb00563.x
- Sue, D. W., Bernier, J. E., Duran, A., Feinberg, L.,

- Pedersen, P., Smith, E., & Vasquez-Nuttall, E. (1982). Position paper: Cross-cultural counseling competencies. *The Counseling Psychologist*, 10, 45-52.
- Sue, D. W., Carter, R. T., Casas, M. J., Fouad, N. A., Ivey, A. E., Jensen, M., ... Vasquez-Nuttall, E. (1998). *Multicultural counseling competencies: Individual and organizational development*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications.
- Summers, M., & Volet, S. (2008). Students' attitudes towards culturally mixed groups on international campuses: Impact of participation in diverse and non-diverse groups. *Studies in Higher Education*, 33(4), 357-370. doi:10.1080/03075070802211430
- 高井次郎 (1989). 在日外国人留学生の適応研究の総括 名古屋大学教育学部紀要, 36, 139-147.
- 高松 里 (1997). 留学生相談システムとしてのボランティア活動—サポートネットワーク<そら>の組織化を通じて 留学生教育, 1, 69-83.
- 高松 里 (2003). 多文化間カウンセリング論 (II) —支援システムの構築 九州大学留学生センター紀要, 13, 101-111.
- 譚 紅艶・渡邊 勉・今野裕之 (2011). 在日外国人留学生の異文化適応に関する心理学的研究の展望 目白大学心理学研究, 7, 95-114.
- 田中正弘 (2016). 質保証のための学生参画—イギリスの事例から 山田礼子 (編) 高等教育の質とその評価 (pp. 127-130) 東信堂
- 田中共子 (1998). 在日留学生の異文化適応—ソーシャルサポート・ネットワーク研究の視点から 教育心理学年報, 37, 143-152. doi:10.5926/arepj1962.37.0_143
- 田中共子 (2000). 留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル ナカニシヤ出版
- 田中共子 (2003). 日本人学生と留学生の対人関係形成の困難に関する原因認知の比較 学生相談研究, 24, 41-51.
- 田中共子 (2015). AUC-GS 学習モデルに基づく日本人学生を対象とした心理教育的な異文化間教育の試み 異文化間教育, 41, 127-143.
- 田中共子・畠中香織・奥西有理 (2011). 日本人学生が在日留学生の友人に期待する行動—異文化間ソーシャル・スキルの実践による異文化間対人関係形成への示唆 多文化関係学, 8, 35-54. doi:10.20657/jsmrejournal.8.0_35
- Tanaka, T., & Okunishi, Y. (2016). Social skill use of international students in Japan. *Japanese Psychological Research*, 58, 54-70. doi:10.1111/jpr.1209
- Tao, K. W., Owen, J., Pace, B. P., & Imel, Z. E. (2015). A meta-analysis of multicultural competencies and psychotherapy process and outcome. *Journal of Counseling Psychology*, 62, 337-350. doi:10.1037/cou0000086
- 戸口太功耶・葛西真記子 (2015). 性の多様性に関する教育実践の国際比較 鳴門教育大学学校教育研究紀要, 30, 65-74.
- Toporek, R. L., & Reza, J. V. (2001). Context as a critical dimension of multicultural counseling: Articulating personal, professional, and institutional competence. *Journal of Multicultural Counseling & Development*, 29, 13-30. doi:10.1002/j.2161-1912.2001.tb00500.x
- Trice, A., & Elliot, J. (1993). Japanese students in America: II College friendship patterns. *Journal of Instructional Psychology*, 20, 262-264.
- 上原麻子 (1988). 留学生の異文化適応 広島大学教育学部日本語教育学科・留学生日本語教育 (編) 言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究 (pp. 111-124) 広島大学教育学部
- Wang, K. T., Li, F., Wang, Y., Hunt, E. N., Yan, G. C., & David, E. (2014). The international friendly campus scale: Development and psychometric evaluation. *International Journal of Intercultural Relations*, 42, 118-128. doi:10.1016/j.ijintrel.2014.05.004
- Ward, C. (2001). *The impact of international students on domestic students and host institutions: A literature review*. New Zealand: Export Education Policy Project, Ministry of Education.
- Ward, C., Bochner, S., & Furnham, A. (2001). *The psychology of culture shock* (2nd ed.). Hove, East Sussex: Routledge.
- Williams, C. T., & Johnson, L. R. (2011). Why can't we be friends?: Multicultural attitudes and friendships with international students. *International Journal of Intercultural Relations*, 35, 41-48. doi:10.1016/j.ijintrel.2010.11.001
- Worthington, R. L., Soth-Monett, A. M., & Moreno,

- M. V. (2007). Multicultural counseling competencies research: A 20-year content analysis. *Journal of Counseling Psychology*, 54, 351-361. doi:10.1037/0022-0167.54.4.351
- Yakunina, E. S., & Weigold, I. K. (2011). Asian international students' intentions to seek counseling: Integrating cognitive and cultural predictors. *Asian American Journal of Psychology*, 2, 219-224. doi:10.1037/a0024821
- Yakushko, O., Davidson, M. M., & Sanford-Martens, T. C. (2008). Seeking help in a foreign land: International students' use patterns for a U.S. university counseling center. *Journal of College Counseling*, 11, 6-18. doi:10.1002/j.2161-1882.2008.tb00020.x
- 山田礼子 (2009). 多文化共生社会をめざして—異文化間教育の政策課題 異文化間教育, 30, 12-24.
- 山森光陽 (2013). 学級規模, 学習集団規模, 児童生徒—教師比に関する教育心理学的研究の展望 教育心理学研究, 61, 206-219. doi:10.5926/jjep.61.206
- 山崎瑞紀・倉元直樹・中村俊哉・横山 剛 (2000). アジア出身日本語学校生の対日態度及び対異文化態度形成におけるエスニシティの役割 1 教育心理学研究, 48, 305-314. doi:10.5926/jjep1953.48.3_305
- 山崎瑞紀・平 直樹・中村俊哉・横山 剛 (1997). アジア系留学生の対日態度及び対異文化態度形成におけるエスニシティの役割 教育心理学研究, 45, 119-128. doi:10.5926/jjep1953.45.2_119
- Yi, J., Giseala, L. J., & Kishimoto, Y. (2003). Utilization of counseling services by international students. *Journal of Instructional Psychology*, 30, 333-342.
- 横田雅弘 (1991). 留学生と日本人学生の親密化に関する研究 異文化間教育, 5, 81-97.
- 横田雅弘 (1998). 留学生と日本人学生の異文化間教育 現代のエスプリ, 377, 109-118.
- 横田雅弘・白土 悟 (2004). 留学生アドバイジング—学習・生活・心理をいかに支援するか ナカニシヤ出版
- Yoon, E., & Portman, T. A. A. (2004). Critical issues of literature on counseling international students. *Journal of Multicultural Counseling and Development*, 32, 33-44. doi:10.1002/j.2161-1912.2004.tb00359.x
- Zane, N., Sue, S., Chang, J., Huang, L., Huang, J., Lowe, S., ... Lee, E. (2005). Beyond ethnic match: Effects of client-therapist cognitive match in problem perception, coping orientation, and therapy goals on treatment outcomes. *Journal of Community Psychology*, 33, 569-585. doi:10.1002/jcop.20067
- Zhou, Y., Jindal-Snape, D., Topping, K., & Todman, J. (2008). Theoretical models of culture shock and adaptation in international students in higher education. *Studies in Higher Education*, 33, 63-75. doi:10.1080/03075070701794833